

相談支援係  
072-941-3365

ICT教育推進係  
072-943-5785

研究研修・幼児教育係  
072-943-5784

教育センター  
Web page は  
こちらから



## 初任者・新規採用者研修 ①

令和8年4月8日(水)午後3時～午後5時に初任者・新規採用者研修 ①を行いました。辻本貴昭 所長からの挨拶のあと、「服務について」と題して教育政策課指導主事より、「人権について考える1 一人権尊重の教育について 学級集団づくりの基礎」と題して人権教育課指導主事より講話がありました。

<受講者感想>

- ・講師の頃から一貫してプロ意識をもって職務に当たってきたが、今年度から初任者として採用され、服務規律の重みを一段と強く感じている。特に信用失墜行為の禁止は、単に個人の問題にとどまらず、勤務校さらには八尾市に対する信頼を左右するかもしれないと思う。常に緊張感を持ち、地域の教育を担う一員としての自覚を深めている。
- ・不祥事を起こさぬように、常に意識していきたいと思う。学校内での不祥事を防ぐためには、何事においても組織として対応していくことが大切であると感じた。
- ・自分は学級経営において「自分らしく安心して過ごせる場所になってほしい」と子どもたちに伝えている。まずは子どもと担任がつながるところから始め、子ども同士をつなげつつ、人権課題にも積極的に取り組んでいきたい。
- ・子どもたちの幸せを願う上で、最も大切なのは「人権を尊重すること」であると改めて感じた。教室で一人ひとりが人権課題を自分の問題、社会の問題として捉え、解決しようとする行動に移すことで安心できる居場所作りに繋がると考えた。自分も他者も幸せに生きていくための権利を確実に確保できるように取り組んでいきたい。

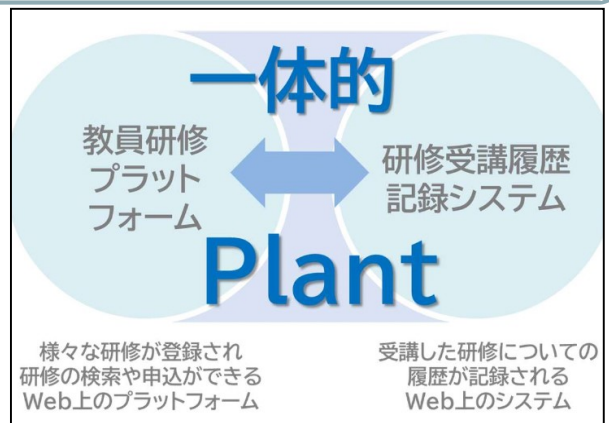
## 初任者・新規採用者研修 ②

令和8年4月10日(金)午後3時～5時に初任者・新規採用者研修 ②を行いました。

最初に 浦上 弘明 教育長から「教育に携われた50年の歩み」メッセージをいただきました。その後、本センター 生田 祐敬 指導主事から全国教職員研修プラットフォーム(Plant)について、今年度の初任者研修・新規採用者研修の概要について説明を行いました。

<受講者感想>

- ・浦上教育長の講話の中で「人間として、そして教師としての人権感覚」という言葉があった。「先生の人間性を出した指導」という言葉もあった。教職員は足並みを揃えて学年・学校一貫性のある指導が大切であるというのは前提としながら、教職員自身の人権感覚を出した指導・対応が大切であるということに気づいた。生徒たちに人間としての大事な感覚を与えられるような教員・担任でありたいと感じた。
- ・先輩教員の授業に学ぶことは大切だと思った。特に人権感覚を研ぎ澄ませることは大切であ



る。また自分のコミュニケーション能力を伸ばしていきたいと思う。特に子どもが発した言葉に反応し、授業に引き付け、ゆるぎない関係づくりを行っていきたい。

- ・「自分の持ち味は努力で改善することができることである」という話を聞いて、自分も様々な人（子ども・保護者・教員等）との出会いを大切に、自分自身の成長につなげていきたい。授業では子どもの側に立って「やりたい」「できた」を大切に実践し、子どもを惹きつけるようなコミュニケーションスキルを身に付けていきたい。

## 教育センター「情報公開コーナー」

教育センターB棟（東側）の2階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も2週間の貸し出しを行っております。今回は4月から5月に配架した雑誌の誌名と目次の一部と書籍の内容を紹介いたします。

「そだちの科学」（日本評論社）No.46 2026.4 April

・特別企画 特集 軽くない発達障害

発達障害者の「親亡き後」問題を考える、と題して日本自閉症協会の 今井 忠 さんが寄稿されています。「親亡き後」もそれまでの生活を継続できているのは居住や日常活動の支援を受けている場合で、主に親が日常的に関わっている在宅の障害者の場合はそうではないとのことでした。

最初に、成人期発達障害者の現状について述べておられます。障害者手帳の所持については、令和4年の調査で医師から発達障害と診断された18歳以上で在宅の人は、その9割が療育手帳もしくは精神障害者保健福祉手帳を所持しているとのことでした。また日常生活での主な支援者は家族や親戚であり、この状況は「都市への人口集中、共働きの増加、核家族化、きょうだいの減少」によって続きにくいとのことでした。経済生活の基盤については同じ調査で、65歳以上の人は働きや仕送りもない人が大半で、社会保障費（障害年金等）が収入のほとんどで、厳しい生活実態がうかがわれます。これらから、在宅の発達障害者の親なき後を親が心配するのは当然で、経済的な支援のほか、住まいや生活支援者、相談相手といった支援が必要であると述べられています。

次に、親は親亡き後にどんな不安を持っているのか、ということについて、アンケートから推察されています。2025年に実施されたアンケート（回答者は60代以上が約7割で、8割以上が母親）によると第1ケアラーは母親がほとんどで、障害者の年齢は30代以上が65.2%で、家族同居が64.1%です。94.2%が療育手帳を所持し、その73.1%が重度です。この調査の中で「とても心配している」の割合は家族同居の場合が79%で特に高くなっています。内容別では、家族同居の場合は「体験を試みているが今後の暮らしの場が思うようにいかず時間だけが過ぎていく」「行く末を見届けて、安心して私の人生を終えたい」等の不安が寄せられているそうです。個別具体的な手立ては統計から答えを導き出せるものではありませんが、似た条件ごとの学習会や情報交換会を地域で障害者団体が開くことは有益であるとされています。

さらに、親が担っていることを次のように整理されています。①お金に関する事項 ②住まい ③健康管理・医療・入院 ④食事や洗濯などの日常の世話 ⑤申請・更新等の手続き ⑥当事者の相談相手 ⑦平日日中の生活 ⑧余暇 ⑨愛情にもとづく気づきと行動

最後に、「親亡き後」の前提となる諸制度が揺らいでいる現実があり、不安が増しているとのこと。障害者の多様な状況に対応し得る制度が必要であるということで締めくくられています。

※漢字の表記は今井氏のまま

（葭仲）

- ・特別企画 どうして頑張りすぎてしまうのか?

特別企画 「どうして頑張りすぎてしまうのか?」の編者である北里大学北里研究所病院精神科 大石 智 部長が特別企画の冒頭で「こころに苦しみが生まれるまでの過程を『頑張りすぎている』という視点で見ると、苦しみが生まれる理由を理解しやすくなる。」と述べられています。この特別企画では、「こころの苦しみを抱える人たちについて『頑張りすぎる』を補助線にして捉えなおし、「こころのケアに優しさや温かみ」がもたらせることを期待されています。

「頑張り」を生むところ —やめられなさの心理学

筑波大学 外山 美樹 教授の段落タイトル◎「はじめに—『頑張り』という美德の陥穽」  
頑張りという言葉には「前向きさ、誠実さ、」などという「美德」がついて回りますが、頑張りすぎて燃え尽きてしまう(バーンアウト)という「陥穽」が準備されていることがあります。◎「努力の目的は、いつの間にかすり替わる—動機づけの変質」習熟目標に基づく努力は自己成長への純粋な関心に支えられている。遂行目標に基づく努力は社会的比較や自己価値の証明に強く結びつく。◎自己評価を守る盾としての「頑張り」努力が自己価値と不可分に結びついたとき、失敗の定義は「単なるエラー」から「存在の全否定」へと肥大化する。典型例はセルフ・ハンディキャッピングで、評価が下がりそうなときに自分に不利な条件を事前に準備する。◎「『諦める』の心理学—目標の解放がもたらす適応と回復」近年の心理学の研究は、達成困難な目標を適切に手放すことはメンタルヘルスを損なう行為ではなく、むしろ心身の健康を死守するための「適応的な選択である」◎「おわりに—『頑張り』から自由になるとは何か」こころのケアにおいてめざすべきは、「頑張りによってみずからを定義しなくても、自己の価値が損なわれないという感覚」を支援的関係性の中で再構築していくことである。(葭仲抜粋)

「道徳教育」(明治図書) 5月号

- ・特集 図解 道徳授業技術のすべて

「特別支援教育研究」(全日本特別支援教育研究連盟編集・東洋館出版社) 5月号

- ・特集 知的障害教育における「深い学び」とは

「初等教育資料」(文部科学省編集・東洋館出版社) 5月号

- ・特集 改定に向けた検討事項と、今、大切にしたい取組②

「中等教育資料」(文部科学省編集・学事出版) 5月号

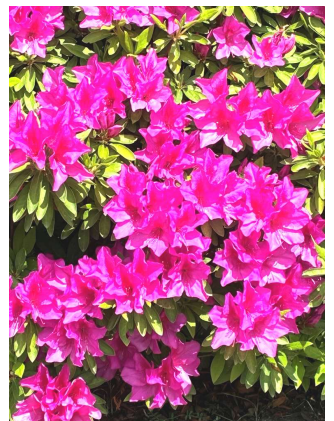
- ・学習指導要領改訂に向けて～各教科等別ワーキンググループにおける審議状況②～

教育科学「国語教育」(明治図書) 5月号

- ・特集 知るだけでうまくいく 発問パターン大全

教育科学「社会科教育」(明治図書) 5月号

- ・特集 資質・能力を高める! 「深い学び」を実現する単元づくり



冒頭の「ひとこと」で国立教育政策研究所 小松 郁夫 名誉所員が「公立学校の管理職の任期」と題して寄稿されています。校長の任期が比較的短い日本の学校の構造的課題として次の4点を指摘されています。①学校ビジョンの継続性が担保されにくい。②教職員文化の変革が進みにくい。③地域との関係構築が浅くなる。④校長自身も「経営者」として成熟する前に移動となる。では短期での移動が慣習化している理由として次の2点を指摘されています。①人事の公平性や透明性を重視する公務員制度。②学校を組織ではなく「配属先」と考えること。結論として校長の任期を柔軟化し、学校ビジョンを各学校が自律的に組織として確立することの必要性を述べられています。（葎仲）

冒頭の「ひとこと」で教育ジャーナリスト 氏岡 真弓 氏が「クリシン」と題して寄稿されています。「アリシン」はニンニクやタマネギに含まれるイオウ化合物で、強い殺菌・抗菌・抗酸化作用を持つ機能性成分。「イリシン」は運動によって骨格筋から分泌される「マイオカイン（筋肉由来のホルモン）」だそうです。「ツカシン」は尼崎市塚口本町にあるショッピングセンターです。では「クリシン」とは、何のことでしょう。言わずと知れた？教育用語で、現行の学習指導要領を検討した会議でも委員からこの言葉がしばしば出たそうです。もとはクリティカルシンキング（critical thinking）で、「クリシン」は省略形です。直訳は「批判的思考」という事なのですが、氏岡氏は「『本当かな？』と考える」「立ち止まって考える」というのが「クリシン」の言い換えとしては分かりやすいとされています。何でも覚えればよいというのではなく、自分なりに考えてみることの大切さを述べられているものと思います。ただ、「クリシン」という言葉は分かりやすい言葉と言えるでしょうか。（葎仲）

独立総合教育政策研究所 安部 慎也 所長が「日本発『Tokkatsu』の国際的意義—『児童生徒を主語にした』学びを体現—と題して寄稿されています。「Tokkatsu」とは特活（特別活動）のことで、「多様な他者との協働や課題解決を通じて非認知能力を総合的に育み、個人のウェルビーイングを実現する日本独自の教育システム」として高く評価されているとのこと。また、経済協力開発機構（OECD）の教育プロジェクト「Education 2030」が提唱する「自ら考え主体的に行動して責任を持って社会変革に関わる力（エージェンシー）」の育成にも親和性が高いとされています。次期学習指導要領においても「特別活動は児童生徒のより主体的な社会参画を実現するための中核として位置付けられる方向」にあるそうです。また「特別活動が民主主義の担い手を育む中核的な役割を果たす」ことについても言及されています。「安易な多数決」に頼るものではなく、「徹底した対話を通じて少数意見にも真摯に耳を傾け、全員が折り合いをつけられる納得解を導き出すプロセス」が重要であるということです。具体的には学校行事のアップデートが必要で「前例踏襲ではなく、自己の生活や身近な社会における課題を解決する探求活動としての側面」を持たなくてはならないということ。この中で教員の役割は「児童生徒との共同エージェンシーを発揮し、ファシリテーションやコーチングを通じて学びのプロセスにお伴走するコーディネーター」としての役割が期待されます。このように国際的に高い評価を得ているわが国の特活（Tokkatsu）が、次期学習指導要領の中でより良く改訂され、個人の非認知能力は勿論のこと、国全体としての民主主義を向上させることを願います。（葎仲）